

【日時】6月13日 19:00～

【会場】中部学院大学 5号館4 階5401教室

室

【テーマ】～機能解剖シリーズ～

「腰部の機能解剖」

【担当者】齊藤 正佳先生

(所属：さとう整形外科 理学療法士)

今回は、機能解剖シリーズとして、「腰部の機能解剖」をさとう整形外科の齊藤正佳先生に講義をしていただいた。

腰痛疾患を扱う上で非常に大事となってくる腰椎や仙腸関節の機能解剖をはじめ、腰椎・仙腸関節の触診を中心に、触診がなぜ大事なのかという点に焦点を当て、臨床に役立てていくことを目的とした。

講義では、はじめに脊柱の機能や腰椎の生態力学的特徴の説明をされた。脊柱の生理的な前・後弯は力学的に安定しており、軸圧に対する抵抗力を高めている。また、腰椎の生態力学的特徴として、屈曲位において椎体・椎間板の圧が上がり、伸展位において椎間関節圧が上がるということが挙げられた。腰痛に関与する因子として、拘縮、筋力低下、マルアライメントがあり、この因子が悪循環を繰り返すことで腰痛が発生・遷延するという。腰痛には機械的腰痛、非機械的腰痛、内臓性腰痛に分類でき、そのほとんどは機械的腰痛であり、その中でも約80%が非特異的腰痛であることを示唆された。

次に腰椎・仙腸関節の解剖、椎間関節・仙腸関節の侵害受容器の位置、3次元的な椎体や仙腸関節の動きを、文献を基に挙げられた。腰椎は上下の関節突起により、椎間関節が形成され、脊髄神経後枝内側枝によって支配を受けている。多裂筋はL3領域では傍脊柱筋と同程度の割合であり、それより下位では多裂筋の方が大きくなり、上位では小さくなるといった解剖学的な特徴をあげられた。そして、多裂筋と椎間関節は同高位での神経支配を受けるため、同時に障害され腰痛を出現させやすいと発表された。また、椎間関節には椎間関節包内に脂肪組織があり、この脂肪組織の動きの制限や挟み込みによって疼痛が現れるという。この脂肪組織の滑動を高めるためには多裂筋の柔軟性・滑動性が重要となってくるということを説明された。さらに、多裂筋は走行上、椎間関節面を強く圧迫する作用を持つため、椎間関節を安定させるためのforce couple様の役割を果たしていると考えられると述べられた。

仙腸関節は腸骨と仙骨の耳状面より形成されており、後方は表層より順に胸腰筋膜・多裂筋・腱膜・大殿筋が付着している。そして、同部には侵害受容器が集中していると説明された。そのため、これらの筋の攣縮は仙腸関節への機械的刺激を増大させる可能性があるとして述べられた。

触診では、腰部周囲の骨・靭帯・筋の触診を行った。まず、腸骨稜から、腰椎棘突起、椎間関節、多裂筋と順を追って触診していった。側弯症がある患者の場合は棘突起の位置が違っていたり、すべり症がある場合は触っていくと凹みがみられたりする。多裂筋の触診では股関節の位置を変え多裂筋を触知しながら骨盤を引き、その引いた分だけ戻すという運動を繰り返すことで収縮が確認できるという。梨状筋部での圧痛所見では、下肢にまで痛みが見られるかどうかで鑑別していく。大殿筋はかなり広い筋であるため、上部線維と下部線維に分けて触診していく必要がある。

今回の講義は、腰部における各関節を 3 次元的な動きで見ることや、筋・靭帯との関係性を理解し、その上で腰痛の疼痛領域を触診で判別、原因の特定をしていくことで理学所見の把握の重要性を示し大いに臨床へと繋がるものとなった。

文責：

竹野貴俊（中部学院大学理学療法学科 4 年）

齊藤正佳（さとう整形外科）